

平成30年度 全国学力・学習状況調査

調査日：平成30年4月17日（火）

対象学年：第6学年

調査内容：教科に関する調査

国語A・算数A 「主として『知識』に関する問題」

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能などに関わる内容

国語B・算数B 「主として『活用』に関する問題」

知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容

理科「主として『知識』に関する問題」「主として『活用』に関する問題」

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能などに関わる内容

知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容

●「教科に関する調査」の概要

◇ 教科別平均正答率（％）

	国語A	国語B	算数A	算数B	理科
第七葛西小	74	57	68	57	61
東京都	74	57	67	55	62
全国	70.7	54.7	63.5	51.5	60.3

● 教科別結果分析と今後の課題

全国平均 70.4%	国語A 74%	<p>国語Aの問題における本校児童の平均正答率は74%で都の平均と同じ、全国平均と比較すると3.3%上回っている。</p> <p>観点別にみると、「書く能力」が最も高く5.4%、「読む能力」が3.4%、「話す・聞く能力」が0.5%、都の平均を上回っている。一方で「言語についての知識・理解・技能」については0.8%下回る結果となった。</p> <p>出題別に見ると、「文中における主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書くことができるかどうかを見る設問」の正答率が都の平均に比べ、10.5%と大きく下回る結果となった。本問では、主語が人ではなかったり、述語に当たる部分が動作を表す表現になっていたりしたため、主語と述語を適切に照応させるには「こと」などを補う必要があり、十分に対応できなかったためと考える。</p> <p>主語・述語の関係の理解を深めるためには、表現するときだけではなく、文章を読むときにも主語と述語との関係を強く意識できるよう指導することが大切である。また、書くことの学習とも関連を図り、児童が自分で書いた文や文章を、主語と述語との関係に注意しながら、丁寧に読み返していく習慣を付けることも大切である。</p>
---------------	------------	---

<p>国語 B 学校平均 57.7%</p> <p>都平均 57.7%</p> <p>全国平均 54.7%</p>	<p>国語 B の問題における本校児童の平均正答率は 57% で、都の平均と同じ、全国平均を 2.3% 上回っている。観点別にみると、「話す・聞く能力」については 0.2%、「読む能力」については、2.3% 都平均を上回っているのに対し、「書く能力」については 2% 都平均よりも下回っている結果となった。設問中 3 つある「書く能力」をみる問題で、正答率が都平均を下回り、無回答率は都平均よりも高い結果となった。無回答率が高い結果からは、「書くこと」に対する児童の苦手意識の高さも感じられる。</p> <p>国語 A では、「書く能力」の平均正答率が最も高く出ているが、国語 B では、「書く能力」が最も低く、無回答率も高かった。これは、A 問題では、問題形式が選択式であったが、B 問題では、記述式であったことが起因していると考えられる。</p> <p>設問で見てみると、「話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして自分の考えをまとめること」の正答率が低く、都の平均が 35% に対し、学校平均は、29.4% と下回っており、10.8% の児童が無解答であった。また、文章の内容を的確に押さえ、文章の一部の内容を条件に合わせて書くという設問では、19.6% の児童が無回答であった。</p> <p>これらのことから、普段の授業の中で、児童が自分の考えを文章で書き表す機会を多く設けて、文章自体に書き慣れることが必要であると考えられる。その上で「目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして、詳しく書くこと」という課題に対して、自分の考えをまとめる際には、相手の意見と自分の意見との共通点や相違点を整理することや自分の考えたことや共感したり納得したりした内容や事例を取り上げるなどして、自分の考えを筋道立ててまとめることができるように指導を工夫していく必要がある。児童の「書くこと」に対する苦手意識を減らし、意欲を高めるためにも、児童の興味・関心に応じた題材を設定したり、目的や相手を明確にしたりすることで、児童が主体的に取り組めるような取り組みも必要である。</p>
<p>算数 A 学校平均 68.0%</p> <p>都平均 67.8%</p> <p>全国平均 63.5%</p>	<p>算数 A の問題における本校児童の平均正答率は、68.0% で全国平均を 4.5%、都平均を 1.0% 上回っている。また、領域別にみても、「数と計算」「量と測定」「数量関係」は全国の平均を上回っているが、「図形」においては、全国平均は上まっているものの、都の平均を 1.5% 下回る結果だった。</p> <p>設問ごとにみると、「角の大きさを正しく求める問題」「量の関係について比べ方や表し方の理解を図る問題」「十進位取り記数法で表された数の大小関係の理解を図る問題」の正答率が高かった。一方で、「円周の意味や、直径の長さや円周の長さの関係について理解しているかどうかを図る問題」では、全国の平均を下回っている。また「小数の除法の意味について理解を図る問題」では、44.1% と全ての問題の中で唯一 50% を下回った。分析結果に基づき改善を図るためには、計算の順序についてのきまりを確実に理解できるようにしたり、具体物を用いた立体図形の構成活動を通して、立体図形の面と面の位置関係について理解できるようにしたり、視覚的に捉え考えさせる指導を進めていく。</p> <p>また、基礎的な計算力を高めるために、少人数指導の指導法を工夫し、個に応じた支援を行うことで、児童の能力を更に高めていく。</p>

<p>算数 B</p> <p>全国平均 都平均 学校平均</p> <p>51.5% 55.7% 50.0%</p>	<p>算数 B の問題における本校児童の平均正答率は、57.0%で全国平均を5.5%、都の平均を2%上回っている。観点別に都の平均と比べると、「数学的な考え方」は1.8%上回り、「数量や図形についての知識・理解」は、1.3%下回っている。全国の平均と比べると、両観点とも4%程度上回った。</p> <p>設問ごとにみると、「数量の関係について示された考えや情報を解釈し、条件を変更した場合について考察し、式や言葉を用いて記述する問題」は全10問中5問あったが、すべてにおいて都の平均を0.8~8.3%上回っている。一方で、「図形やグラフを見て、その特徴をつかんで記述式で説明する問題」では、正答率が都の平均を0.6~1.5%下回り、無回答率が都の平均より2%程度高い。また、問題形式が選択式の3問は、すべて正答率が0.7~2.7%都の平均より下回っている。</p> <p>このことから、問題を見たときに、直感的なひらめきで回答したりあきらめたりせず、その回答に至る根拠を明確にして確かめたり、与えられた図形や資料の見方を変えたりして取り組む学習を充実させていくことが必要である。</p>
<p>理科</p> <p>全国平均 都平均 学校平均</p> <p>60.3% 62.1% 60.0%</p>	<p>理科における本校児童の平均正答率は61.0%で、全国平均を0.7%上回っており、都の平均を1.0%下回っている。正答率を本校と都の平均とで比べると、主として、「知識」に関する問題では3.0%上回っており、主として「活用」に関する問題では2.0%下回っている。</p> <p>設問ごとにみると、自然事象についての知識・理解の設問の中で、科学的な言葉を問う短答式問題では、5.6%都の平均を上回った。しかしながら、同種の設問で記述式問題では、8.2%都の平均を下回っている。言葉や原理などの知識は有しているが、これらを基にして説明することにおいて、本校として課題を示す結果となっている。</p> <p>これからの教育で「説明する力」が求められていく中、本校はどの教科においても、この能力を育てていくことに、一層注力していく必要がある。</p>